

平成30年度 福岡市史編さん委員会議事録

1 実施日時 平成31年2月6日(水) 13時15分～14時00分

2 実施会場 福岡市議会棟7階 第1・2議員応接室

3 出席者

(1) 出席委員 10名

貞刈 厚仁 委員長(福岡市副市長)

有馬 学 副委員長(九州大学名誉教授, 福岡市博物館館長)

柴多 一雄 委員(長崎大学名誉教授)

川原 正孝 委員(福岡商工会議所副会頭)

川崎 隆生 委員(西日本新聞社代表取締役会長)

林 君子 委員(福岡市七区男女共同参画協議会代表)

宇田川宣人 委員(福岡文化連盟理事)

落石 俊則 委員(福岡市議会第3委員会委員長)

光山 裕朗 委員(福岡市総務企画局長)

天本 俊明 委員(福岡市経済観光文化局理事)

欠席委員 2名

笹山 守人 委員(福岡市自治協議会等7区会長会代表)

星子 明夫 委員(福岡市教育長)

(2) 事務局 13名

(博物館副館長, 博物館事業管理部長, 市史編さん室長 外)

4 議事

(1) 平成30年度 福岡市史編さん事業実施状況報告について

(2) 平成31年度 福岡市史編さん事業実施計画(案)について

5 議事録

(1) 議事1「平成30年度 福岡市史編さん事業実施状況報告について」

(委員)

参考資料の1頁目の(1)沿革の部分に, 市史編集委員会の発足日は書いてあるが, 市史編さん委員会の発足日の記載がない。

(事務局)

次第が載っている資料の3頁目に, 市史編さん委員会の設置要綱を掲載しており, 下段に設置年月日を記載している。福岡市史編さん委員会は, 平成16年11月16日の設置である。

(委員)

沿革にも記載したほうがいいと思うが。

(事務局)

今後, そのようにする。

・その他質問, 意見なし

・議事1は出席委員の承認を得た

(2) 議事2「平成31年度 福岡市史編さん事業実施計画(案)について」

- ・事務局説明に対し特に質問、意見なし
- ・議事2は出席委員の承認を得た

(3) その他意見交換

(委員長)

せっかくの機会であり、市史に関するご質問などがあればお願いします。

(委員)

2020年はオリンピックがあるが、そこに向けて何か事業は考えているのか。

(事務局)

市史編さん室は博物館に置かれており、市史編さん事業も博物館事業の一環であるが、博物館全体として、直接オリンピックに関連する事業はない。

福岡市史編さん事業は、福岡の歴史を考えるうえで絶対に必要な資料を後世に残す、ということが一番の目的。

それを伝わりやすい形の資源にして、市民の皆さんに示していくのが仕事と考えている。

したがって、2019年のラグビーワールドカップや、2020年のオリンピックで、外国から来られるお客様にも、福岡の歴史、文化を知っていただけるような情報発信を、意識しながらやっていきたい。

(委員)

北九州市で、教育・文化編として、平易な市史が出ている【『新修・北九州市史』文化編・教育編、2018年】。内容が分かりやすく、現代の北九州市の美術、文学、文化がよく分かる作りになっている。厚い本だが辞書としても便利で、インバウンドやオリンピックで外国から来る客にも使える。

福岡市も博物館、美術館などと同じような資源があり、厚い市史の形ではなく、薄いものでもよいので、何か資源をまとめたようなものは出せないのか。

(事務局)

既に博物館で、図録に掲載している資料を中心として福岡の歴史を展開した「Classic City Fukuoka」という、英語版に中国語、韓国語のテキストを挟み込む形のハンディな冊子を刊行している。これを使って多面的な展開を考えている。

一つ追加して申し上げたいのは、自治体史の通史編は厚くて重く、そのままの形で市民に届けるのは非常に難しい。

そこで、様々な個別のテーマを、厚くなくハンディで、かつカラフルでビジュアルな本として考え直したのがブックレットシリーズである。

現在、新しい企画、仕組みで出版できないか考えている。

(委員)

市史の値段はどうなっているのか。

(事務局)

資料編、民俗編は5,000円、特別編は1,800円から3,600円と幅がある。

(委員)

価格設定は必要経費で割った結果なのか。それとも市からの補助があるのか。

(事務局)

市の施策として実施しており、この価格設定ができています。

(委員)

刊行計画を見ると、あと10年足らずで市史本体は終了するようだが、ブックレットとの関係はどうなるのか。

(事務局)

ブックレットは、多くの巻数、テーマで出版されないと、福岡の歴史、文化の全体像が伝わらない。最後まで福岡市の枠、施策としてやっていくのか、という点も考えないといけない。

(委員)

価格を抑え、手に取りやすいものにするのも一考。早く結論を出したほうがいい。

(事務局)

まもなく結論が出せると考えている。

(委員)

参考資料6・7頁の2026年、『近現代4』は、資料には「昭和のはじめ～」と書いてあるが、平成まで書くのか。

(事務局)

平成までは行かないと考えている。

(委員)

戦後までは行くのか。

(事務局)

資料編の制作には学生の参考書とは異なり、一定の資料の密度が必要で、4冊で戦後までカバーするには資料の量が膨大すぎる。特定分野だけ記述するわけにも行かず、戦後までは厳しいと判断している。

(委員)

中心的な執筆者、編集委員の平均年齢はどうか。

(事務局)

時間をかければかけるほど、平均年齢は上がっていく。新規補充も難しく悩みの種。ただ、福岡市史の近現代部会は、ほぼ現役の学者、研究者が執筆している。

(委員)

参考資料6頁、『近現代4』に「昭和の初め～」と書いてあるが、現代まで資料だけでも出さないとまずいのではないか。

(事務局)

福岡市史の資料編は、一次資料をベースとしておりデータ集ではない。一次資料を積み上げると平成までは難しく、それをブックレットシリーズでカバーしていくのが我々の考え方。

(委員)

福岡市の自前のデータを整理すれば、例えば文学が劣るとか、演劇が足りないとか、アジア文化は全国にさきがけて進んでいるとか、色々なことが分かってくる。

資料編の近現代は、慎重に丁寧に、現代を反映させた方がいいと考える。

(事務局)

ご意見感謝する。

(委員)

参考資料6頁、『近現代4』は、「昭和の初め～」となっているが近現代の時代区分は。

(事務局)

『近現代3』は明治末から大正期、『近現代4』は、くくりとしては昭和の初めくらいまで。

(委員)

年間予算はどうなっているのか。

(事務局)

5,000万円余の予算を組んでいる。

(委員)

推移はどうか。

(事務局)

基本的に財政状況が厳しく、若干減少の傾向である。

(委員)

参考資料7頁に、2020年からブックレット刊行開始と書いているが、一気に何冊か出しているのか。

(事務局)

年に複数冊を出していかないと出版が進んでいると認識されない。1冊ずつではない出し方を考えていく。

(委員)

資料集めなど準備は進んでいるのか。

(事務局)

現在はシリーズの全体構想を議論している。書目案などは見えてきている。

(委員)

最初にブックレットの話が出たとき、それから2～3年で出版できるものと考えていた。

(事務局)

最初に話したときは、そのような想定をしていた。

(委員長)

最後に事務局から意見、考えはないか。

(事務局)

福岡市史の編さんでは、学者、専門家など様々な方々のお力添え、ご意見をいただきながら、時間をかけて内容を精査し、世に出しておかしくないものを、きっちり作っていただいている。このため、1巻の制作に当たって、非常に長い期間を必要とする。その中で、市としても最後までやり遂げる覚悟を持って市史の編さんに臨んでいきたい。

皆様方のお力添えを、引き続きよろしくお願ひしたいと考えている。

(4) 閉会